2022 年度ＧＴセミナー
GT サミット 2022①

第２８７号　２０２２年８月２９日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カグヤ　奥山卓矢

GT サミット①

２０２２年８月 22 日～23 日に「GT サミット 2022」を開催しました。

全国の GT 園の園長先生方にご参加頂きました。
数年ぶりにお会いする園長先生方同士の歓喜の声も会場では聞かれました。

本誌含め、４回に分けて GT サミット 2022 の内容をお送りする予定です。

【セミナープログラム】

8 月 22 日（月）セミナー1 日目

13:30～15:30　阿久津先生 ご講演
15:30～15:50　休憩
15:50～17:50　藤森代表 ご講演
18:00　　１日目終了

8 月 23 日（火）セミナー2 日目

9:30～11:30　リレー講演
11:30～13:00　昼食
13:00～15:00　Q&A
15:00　　２日目終了

GT サミット 2022　基調講演

保育環境研究所ギビングツリー代表　藤森平司氏（新宿せいが子ども園　園長）

目次

—はじめに—
—リーダーの役割とは—
—時代を読む（新聞記事から）—
—目指す保育—
—地域活動—
—食の取り組み①—
—食の取り組み②—

—はじめに—

参加者の半分が画面越しなので見えないのですが、昔から好きな言葉は「距離に負けるな好奇心」。昔 CM にあったが、「コロナに負けるな好奇心」で、そんなものに負けないでと思っているので、皆さんに会えると嬉しい。先ほど振られたので話をしたが、キャリアアップ研修を批判ばかりしないで、自分でやるかと思って、東京都の認可を受けるには、非営利団体しかだめで GT でやろうと思ったが、株式会社なので非営利団体ではない。では NPO を作ろうと思って申請をしたら、東京都は今は NPO ではダメと却下された。じゃあだめだねではなくて、私の場合、やらない選択肢はないので何とかしようとなる。社会福祉法人は非営利団体なので、やろうと申請をする。やってみてわかったのが、講師が誰にするのかのハードルが高い。これをやってみてわかったのだが、大学の教授たちの居場所を作るために、作ったのかなと思うくらい大学教授というだけで講師は簡単にクリアする。そうでない人が講師になろうとすると、ハードルが高い。マネジメントは、岩手で 15 時間やっていますので実績がある。幼児教育については、鹿児島で 15 時間。乳児保育は、単発で小さいのしか行っていないのでダメと言ってきた。最後通したのが、「新渡戸短期大学で客員教授をやっています」と言ったらそれで通った。その次のハードルが教えるカリキュラムを出せと言って、こういうことを話したい。最近の知見や脳科学から見る乳幼児とか出したらダメと。教科書があるので、教科書通り教えてくださいと言われた。教科書通りなら、誰でもいいだろうと思う。最近の知見を中心にしている。久しぶりにマネジメントを 15 時間やってみると、リーダーシップ論を話すと、改めてリーダーシップはどういうものかをじっくり読むと、このサミットでやらなければいけないことの一つは、管理職リーダーは時代を見る力が必要です。

—リーダーの役割とは—

人がついていこうと思うなら、時代をとらえて、時代に対して、物事を進めることをしないとリーダーではない。どんな時代になっているか、時代が何を求めているかを捉えないといけない。時代がメディアを通して出るが、きちんとした真実を見抜いて分析する力。同じニュースを聞いても、違う分析をしたら間違ってしまうので、分析する力が大事です。もっとも大事なのが、それを実際に改革して実行する力です。これらがないとだめです。大学教授はど

んなに偉くても、分析で終わってしまう。実践は現場がないと無理。現場は、分析力が薄いことがあるので、リーダーはそこをしていかないといけない。一人では限界があるので、GT という会があって、共有してある方向を見つけ、各園で実践し改革していくことだと思います。どんな時代化をとらえないといけないと思います。一昨日たまたま、保護者に対して、最近の新聞ネタを話しました。昨日、学研で「外国籍の子どもたちに、どうしたらいいか」を話してと言われて話した。私は講演をするのが好きなのは、それが自分の学びになっています。「外国籍の子どもについて」というのは、話したことがない。藤森メソッドと、どうつながるかを考えるわけです。別個にあるわけではないので、通じるものがあり、自分なりに勉強して、どうつながっているかを考えて、パワポを作るわけですからね。家に帰って、第一声、妻に「改めていろいろな発見をして、面白かった」といった。新しいことが学べる。違うテーマで依頼が来ると面白い。ただ面白いと言っても、当日まではプレッシャーがあります。当日までは悩んで大変。職員を巻き込んだり、動画も前日までああしたり、こうしたり、変身ゾーンごっこゾーンに衣装がある。この目的の一つは、職業体験をする意味がある。医者の白衣や宇宙服を着て、宇宙船に乗り込むごっこをするとか、子どもたちがするための衣装があります。女の子で流行っているのは、パーティーに行くドレス。大人の真似をしたいというのがある。外国と違って、うちにないが外国にあるのは靴や帽子がある。パーティーごっこみたいなことをしている。もう一つは、外国の衣装を着る体験もある。そういうことがあるので、外国の服を着ている服はないか？と聞いたら、「さぁ？」と職員に言われた。「どういう服装ですか？」と聞かれたので、シンガポールの人が来た時に、王族みたいなやつといったら、職員みんながもらっていません。「園長先生、ぼけたのでは？笑」といわれた。思い違いかなと思って、家に帰ったらある職員が「写真持っていました！」と送ってきた。そんなことを前日までやっているので、当日までのプレッシャーで大変だが、整理になるので面白いことがあります。その中で分析することが大事です。

―時代を読む（新聞記事から）―

新聞記事で、私が記事から時代を分析するかを考えてもらいたい。一昨日の園内研修で話したことです。先週の朝日新聞の東大の推薦入試の記事のことです。東大の入試に推薦が出来た。大学の入試学校推薦型選抜と総合型選抜の出願が秋からははじまる。知識偏重ではない授業や、入試への転換が叫ばれる中、高校時代の学びや活動の実績で評価される。入試の募集枠が広がっているということは、学力観が大きく変わるということです。保護者に言ったのは、今の園児の保護者が自分の子どもが大学入試を受けるときに 10 年後くらいですよ。どんな問題になっているかわかる。知識偏重の偏差値は 10 年後にはない。そのために塾を行っても役に立たないことを話します。では、どんな力が求められるかというと、2016 年から東大では推薦入試があり、全学部で 100 人ほど枠がある。以前は最大 1 校 2 名だったが、今は 4 名になったそうです。一般選抜と異なって、学部に出願する。何学部何学科と推薦する。今言われているのが、高校の進学指導の先生に、「君の成績では、何学部は難しいから何学部にしたら？」という助言はいけないですね。何をしたいかということが大事であって、成績で進路を変えるのは大人の放漫。学科が 1 年次から決まる。推薦要件、入試形式は学部学科ごとに異なり、受験生が論文や活動実績、語学力を裏付ける書類を提出する。11 月に一次選考、12 月に面接二次選考、1 月に共通テストということです。二つ出ているが、一つが渋谷教育学園の渋谷中高で、3 人の合格者が出たそうです。受験した学生に聞くと学校が推薦文を読んでくれて、学部や研究室を求めているということですね。ここには、具体的なことは書いていないが、高 2 までで論文を書くが、まず白紙で出して自分で問いを立てる。これから必要な力ですね。自分で問いを立てて解決を見つけることです。学びの多様性を認めることがあります。もう一つの高校が私の母校（日比谷高校）は二人合格したが、日比谷からは二人とも理系女

子だそうです。そのうちの一人は生物の実績で出願し、医学部合格。もう一人は英語の授業で教育格差についてディスカッションをして、近隣の小学校で放課後の学習支援の仕組みづくりに取り組んだ生徒。保護者の経済格差が、どう影響するかを自ら研究に取り組み、教育学部に合格したそうです。合格者に繋がるのは熱意で、面接練習で、校長が面接練習をしたが学力だけではなく、熱意・本気度があるか。東大の場合は、一般選抜で入学すると、2年生前の途中までの成績で進む学部が決まります。学校推薦型では、受験するときから受験するときから学部に出願する。推薦は学部。教養課程があり、2年生までの成績で学部が決まります。推薦はやりたいことが明確な子が求められている。この学びたいことが、本心からでないといけない。理系文系にかかわらず、探求していく姿勢が重要。これは全科目に探究心が書かれています。ですから、この高校では、1年生から理数探究基礎を必修科目にしたそうです。科目として必修にしたそうです。それはさまざまな学問で必要なデータサイエンスの要素を盛り込んだ授業。体育や芸術科目を含め、全教員で担当する。3年間通して、生徒の探求を支援する。こういうことが新聞に載っていました。先週の日経新聞に連作をしていたタイトルが「偏差値時代終焉・終幕の足音」。そこに書かれているのが、受験地獄と言われた入試環境が、18歳人口の減少で激変し、偏差値序列化する時代が終わろうとしている。人材育成の新たな道を考えないといけない。これが現在ですね。推薦がどんどん増え、一般入試の比率が減っています。例えば今年の春、早稲田大学は一般入試の学生が56%。02年の16ポイント低下した。一般入試がそれまで72%だったのが今年56パーセント変わった。慶応も一般入試が57%になった。ほとんど推薦になってくるということですね。その中の一つがAO入試。総合型のAO入試が増えて2020年は33.3パーセント。2021年は50.3%。初めて半数を超えているんですね。私立は20パーセント増えて6割がAO入試。大学は選抜する生徒は点数じゃなくなってきている。今は過半数を超えてきているので、偏差値を上げるような教育をしても、大学に通らない。リクルート総研の人が言っているのは、年内入試が主流になれば、一般入試難易度を示す偏差値が意味をなくなる。大学選びの軸が、偏差値しかない時代はなくなったといっている。明治維新後、敗戦後の欧米に追い付け追い越せの時代は、必ずある正解に早く到達することが競わすのが一般入試に有効だった。しかし、日本社会が成熟し、欧米のお手本に頼れない時代には、正解があるか分からない問題に取り組む力が重要。それは思考力や学習への意欲を多面的に評価することに代わってきている。それが起きてくると、日本の大学の問題は入るのは難しいが、出るのは簡単という言い方。今度は入るのが簡単になり、出るのも簡単になってしまうと社会で役に立たなくなってしまう。大学の卒業比率は、日本は93パーセント。アメリカでは38パーセント。フランスでも41パーセント。これまでの入試は厳しいから、出るのが簡単だから、93パーセントの反論は聞かなくなる。日本だけ出るのも、入れるのも簡単になってしまうと、社会では役に立たなくなってしまう。アメリカの大学も教えた柳沢名誉教授は、1点刻みの選抜が権威を持つ時代の終わりは歓迎すべきだ。しかし、社会や企業は求める人物像を明確化し、大学は厳しい出口管理で、学生を鍛えないと日本の成長は厳しいと変わっています。いかに私たちが関わっている子どもたちに、早く保護者に言わないといけないことです。学力観がどんどん変わってきています。

―目指す保育―

私たちが目指しているもので、そこにある。探求心や非認知能力ということがあります。そういう意味で、どういう保育をしているかがあるが、別の観点からもう一つ。学校を地域の共有地にという記事があって、学校の校庭や教室を住民に開放。学童保育などで活用。熊本の教育長と話したことだが、学校にもっと機能を入れるべきだと言っていた。これがいくつかあったが、私が大学の卒論のテーマで、学校の中の家庭科室、理科室、図書室をいかに放課後に地域と共有できるか。貸し出しが出来るかの課題だった。区切って貸し出しが出来て、せっかく地域の中にあるの

に、空いている時間はもったいないという考え方で、ここに来て言われてきている。放課後学童保育で活用と書いてあるが、ドイツもそうだが、今後学童保育が大事になってくる。保育園をいっぱい作ったくらい、学童を作ることになる。6 年生までいないと 4 年生からは家では無理です。どうしたらいいかというと、ドイツでは、学童では教室を学童クラブの部屋にする。新聞に出ているが、日本は共同利用に教員が嫌がる。自分の個室だと思っている人が多い。私も教員の時に、教室に私物がおいている教員がいた。ドイツでは、教室は教員に貸しているイメージで、午後は学童。ドイツは半日制だから、学校は午前中で終わってしまう。全ての子どもに学童が必要です。スポーツクラブに行く子もいるが、教室を使えばどうってことはない。せいがの森の時から、保育園は子育て支援の核になると言っていたが、子どもが通ってくるものだけではなくて、地域のための施設で、私はもっと拡大をして、地域にとって必要な施設にするべきだと思っています。このニュースでは、一つは地域に開放する場所を作りました。そこで、うちの園の実践を写真で紹介します。どれだけ地域にその園があってよかったねと言われるかです。そうでないと、ただの迷惑施設です、ごみは多い、子どもの声はうるさいし、車は止まる。そうではない人たちにとっても、地域にとって必要な施設になるべきです。小学校もそうなりつつあり、校庭や教室を放課後に学童に貸すとか、休日に音楽室でバンドの練習をしたり、図工室で DIY 教室を開くとか、今までは選挙の時しか、使われなかったです。せっかく理科室や図工室があるのですからね。八王子の時に、小学校といろいろやっていた時に、校長会の中で、「地域でやっているそうだけど、電気代もかかるから、なかなかできない」という校長がいた。私は、「学校は誰のお金で立てていると思うのですか？税金を使っているのに、それを学校の先生に貸しているのに、地域に貸さないとは何事だ」という話をしたことがあります。保育園も補助金でやっていますからね。これは私の園の一つの悩みだが、地域に開放する場所を、職員がそれを保育の一環と思ってくれないんですね。園長の趣味くらいにしか思ってくれない。園の存続のためにやっているのだと思ってほしいが、クラスの保育をすることが仕事ですと言うんですねえ。そのあと子どたちは、地域に出ていくので、地域を作っていくことも仕事だと思うんですけどね。

―地域活動―

これはどこかの機会で見せたいのが、私が教員時代にやった子ども会活動が映画になっています。社協で貸し出している映画があるが、地域の子どもたちを集めて、地域のお年寄りに訪ねて、何の特技を持っているかをインタビューをして、お年寄り地図を作ったことがあります。どこに、どんなお年寄りがいるかの地図を作ることを映画にしたいとなった。どんな得意を持っているかを集めたらそれを映画にしたいとなった。事前にお父さんたちが役員なので、どこで取材をするか決めて、文房具屋のおじさんを撮ろうとなった。映画ですから、照明を使ったりした。子どもたちは取材に行こうと言って、子どもたちが「こんにちは、話を聞かせてもらえますか？」と聞いた。そうしたら、いたずら心で「忙しいから」といわれたら、子どもたちは帰ってきてしまった。地域との連携が昔から課題です。それを教員がしなかった。今は、そういう時代になったなと思うことが一つ。

―食の取り組み①―

最近のニュース、とくに高田馬場を見るとわかるが、食の問題が出ている。ここへ来て急に出ているのが、種苗法。種の法律が改定されて、外国の種が輸入することが OK になった。昔から日本にある種がなくなりつつある。もう一つは外国で禁止されている除草剤・遺伝子組み換え食品を世界一多く使っている国になっている。その問題は、皆さんは買うときに国産を買うかもしれないが、国産だから安心ではないです。外国の野菜の方が、安心な可能性があります。種を輸入していると種の周りに農薬がコーティングされています。それを撒いて育てている。種を買う意味は、遺伝子組み換えを使っている。遺伝子組み換えは、改めて聴くとぞっとする。例えば、大きなナスを作ろうとい

うのは、大きいナス同士を掛け合わせるのは、品種改良。茄子の遺伝子に豚の遺伝子を入れるなど、違う遺伝子を入れるのが、遺伝子組み換え。遺伝子組み換えからは子孫を作らない。なので、毎回種を買わないといけない。大豆ミートもあるが、その大豆ミートの大豆も遺伝子組み換えだったら、まだ普通の肉の方が安心です。最近天候不順で、多く獲れすぎたから捨てましたとかあるが、いろいろな問題が食で起きています。いかに良かったのように言うが、オリンピックですね。ヨーロッパの人が鶏肉を食べなかった。ゲージの中で入れている鶏肉は外国では食べません。豚肉もそうです。野外の豚肉は内臓の色も味もいいが、日本ではゲージに入れて飼っている。それを政府はそれを禁止しようとした。野飼いのブタはダメと言おうとして猛反対で却下になった。それから皆さんが気にするのが添加物ですね。飲み物もお茶を見て原材料に書いてあるが、お茶はビタミンＣが入っているが、後ろを見るとビタミンＣが斜線の前と後ろにあるお茶がある。斜線の後ろにビタミンＣと書いてあるものは添加物として加えている。基本的にコンビニ売っている飲み物は、添加物でできているようなものです。これまでは別掲で書かれていたが、目立つからと業者が、斜線にするようにと言って、何となく斜線が入っている、その斜線も撤廃しようとしている。特に日本は斜線の前に、今までは別掲で書かれていたが、業者が斜線にしている中に書いてある。その斜線も今撤廃しようとしている。日本は、斜線の前に天然添加物は書いていいということがあって、食文化が非常に外国が気を使っていて、日本の国民の健康を害している。除草剤もひどい。アメリカで裁判起こされていて、発がん性がすごいとその会社が負けた。ふつうは負けたら、その商品を作るのをやめる。何をしたか。負けたニュースを止めて、日本に売りつけようとして、日本だけがそれを買って、使っていることがあって、食がおかしい。例えば、中国は食がひどいです。
しかし、子どもの給食だけには、絶対添加物は使っていないです。確かに、これは日本でも少しずつ起きてきて、この近くにピーコックというスーパーがある。オーガニックの場所が作られた。そういう風になっている割には、給食がなっていない。なぜかというと、供給が安定しない。無添加で安全なものだが、うちで業者に頼んだ時に当日納品のルールがあるために、腐っていたことがあった。その業者は前日まで床に置いていた。それを当日納品。だったら、前日も持ってきていたら冷蔵庫に入れて置ける。当日刈入れならわかるが、業者のところで置いておいても意味ないじゃんと思う。

―食の取り組み②―

ドイツに行ったときに、カルチャーショックだったのが、給食がみんな冷凍だったと聞いたこと。私たちは冷凍のイメージが悪い。なんで冷凍を使うかといったら、一つが EU 諸国でドイツだけで採れたものでないもの、各地でオーガニックで自然で育ったものが納品できるようになった。オーガニックで、その地域で育ったものをとれるけど、運ぶ間に保存料を使う。そうではなくて、その場所で料理をして、冷凍して持ってくれば、オーガニックなものに保存料を入れないから安全だ、という言い方をしていた。冷凍のイメージが良くなかったが、安全と聞いた時に、でも栄養価は壊れるし、まずくないと思った。それがここにきて、急速冷凍。そういう給食をやっているところがあって、そこで講座を受けた。食べ物につく菌は、零下 18 度以下になると繁殖する菌はない。作ったら一気に熱いまま零下 18 度以下にする。この間の時間が短いほど菌がない。その技術が最近出来るようになった。菌だけではなく、栄養価も味も損なわない。冷凍技術が急速に広がり、高田馬場は冷凍自動販売機が多い。ラーメンから何でも冷凍です。安全な食という意味ではなく、味が損なわないという意味ですけどね。隣の神楽坂フランスのピカールのもあります。冷凍すれば、フランスからも輸入できる。これからは食の安全と、冷凍が出来ないか。私はぜひ広めていきたい１つが、人口減少社会になった時に、一番は人材難ですね。人が少なることは保育士が足りないだけでなく、調理もなかなか足りない。なかなか探すのも大変。ドイツも１園に一人か二人だけの調理員で、後は冷凍なんですね。

安全で栄養も保って、しかも急速冷凍だと、１年くらい持つので保存食になり、生産者も余分に取れたら冷凍で取っとくと、供給も安定する。保育園も冷凍でやったらどうかと言うことを思っています。それは試してうちでやってみようと、地域でこういう場所を作ってみた。地下の駐車場だが、地域の人が来てコーヒーを飲んだりできる喫茶ルーム。コーヒーサーバーも入り、飲むことが出来る。左側が Pick Up Here。ここの棚からピックアップできるものだが、近くに無添加のお店があるが、そこのシェフは全て 100%無添加無農薬の料理を出す店があるので、その店にネットで注文をして、お惣菜を注文したものをこの棚に入れて、地域の人が頼んだ人が持って帰る。園はお金をやり取りがなくて、ネット決済をして、番号が出るので棚から持って帰る。植木のスペースに冷凍自動販売機を置く予定です。どひえもんです。それがなぜかというと、一つは新聞記事に出ていたことです。一つは、親、女性の献立地獄のことが出ていました。毎日献立を立てるのが、地獄だと出ていた。昨日出ていたニュースが、子育て世代 時間貧困。日本は時間貧困で、子どものケア余暇がＧ７で一番少ないと出ていました。ひとり親はもっと少ない。６歳未満の子どもを育てる世代が苦しめている。十分な家事や余暇が取れない、世界で最低。余裕がないということですね。
仕事・学校・通学はＧ７の中で長い。イタリアは 177 分に対して、日本は３６３分。それに対して、家事や買い物・家族ケアは、日本は１３２分。アメリカは２１９分あります。睡眠・食事・自分へのケアは、フランスは７５２分、日本は６２０分で最低。社会文化スポーツも最低。ドイツとかは、育児と仕事を両立するためにまず削減するのが家事。掃除も食事も外注。それに対して日本は外注に罪悪感がある。それは主婦の仕事だと思う。このシステムをするときに、地域にこう言われました。「お惣菜を買って帰る、冷凍を使うと、罪悪感があったが、安全な食といえると、買いやすい」と言われました。手抜きのためではなく、子どもの健康のために買って帰れると思うと、買いやすいと言われました。これを来月から始める予定です。そうすると、長崎の西村君が「うちの園でも、自動販売機ならできるんじゃない？」といったができる。それを置けば、冷凍で置けるわけで、地域にもおけるのでサービスが可能。無農薬の商品を置いといて、ネットで買える。後ろが網戸になっていて、開けてそこに入れて、欲しい人は開けて持って帰る。中は一時保育の部屋なので、ここで保育をする。私として新しい試みだが、リフレッシュのための一時保育をやるが、リフレッシュのためといって、何でリフレッシュするかです。今の親はそれがなくなってきている。昔はテニスするとかあったが、ただ放浪して歩くので、子どもを預けて、他のお母さんと話すようにした。親同士の繋がりにして、子どもだけ置いて帰るのではなくて、子どもは子ども同士で遊び、親は親同士でリフレッシュする部屋を改装した。地下ですので、駐輪場なので、そこに広げてオープンカフェもできるので、コロナの間でも広くできる。この前プレオープンをしたが、午前中だけだったが 70 名くらい来た。行くところがなくて探している。場所の提供も最近のニュースを見ると、だんだん求められているんですね。こういうことをニュースで見て、分析をして、何が必要なのかをしていかないといけないと思います。

本稿は、2022 年 8 月 22 日に開催した「GT サミット 2022」の基調講演の内容をまとめたものです。

（文責/奥山卓矢）